

きは陽にして豊作のしるし、おくる、は陰にして違作とするべし。

〔農業全書十一附錄〕凡飢饉年の兆をば、智ある人は夏の中にもはや見及ぶべし、尤七月末八月初には慥に見ゆる物也、されども民は愚なるものにて、其年なみ五こくの色を見て、飢饉を悟り、早く身持を引かへて勤る事を怠らず、先秋の實り出来ぬれば悦びいさみて、春のききん餓死すべき事をも辨へず、心にまかせ飲み食ひ、萬の物を用に志たがひ求るゆへ、春の蓄へたらずして、年明れば頓て飢る者おほし。略中 前に記すごとく、飢饉の兆は初秋には必志る、物なり、農の總司より其下なる役人に委しく言志めし、農民の食物を儉約せしむべし、扱蕪菁を多く種さすべし、畠の地ごしらへ段々念を入れ少延引すとも、糞もかれ地もされたるよし、凶年には虫多き事あり、其ゆへ殊に地ごしらへよくすべし、若圃のなき所ならば、早田中田の跡を委しくこしらへ用ゆべし、必力をつくし、人々相應に多く蒔べし。は、役人より借銀才覺してつかはすべし 尤後の手入れこやしに心を用ゆべし、次に大根を多く蒔べし、地ごしらへ右にいふごとし蕪と大こんは、小きよりまびきて汁にもし、長するに志たがひ、食物に加へて穀物の助とすべし、よく農人をさとし、秋初より覺悟し、蕪大こんを多くうへなばたとひ領主のめぐみ薄しといふとも、貧民までも餓死のうれへなかるべし、又凶年にはそら豆をも多く種べし、麥より少はやくいできぬれば、麥に取つく時の助と成べし、農人つねぐ蕪大根のたねを餘分に蓄置べしなみの年にてもおほく作り立、農人これを用ひて、冬春麥に取つくまでの穀食の助とすべし。

〔救荒事宜〕凶災の初毛替すべき事、凶災にて田畠とも植付おくる、時は、はやく地利を考へて、毛替すべし、水にて作物をそこなはばやく水にかまはぬものを植へ、旱にて作物をそこなはばは、はやく旱にかまはぬものを植へば、彼を失ふとも此を得て、半作にはなるべし、是はいかにも時に先だちて、はやくなすをよしとす。